MMMFIRH
FF
HIR LFBIRNH

カビルス卿回顧録

Memoirs of Cabirus

本書は数十年前に書かれたものであるにも関わらず、当図書館の蔵書になったのは、つい最近のことである。アバタール島における植民の試みにカビルス卿は命を捧げたが、コロニーはついには破滅的な運命を辿ってしまった。著者である歴史家のコルビーは、その卿の記録係として本書を後世に伝えた者である。

アビスの入植者から連絡が途絶えて久しい。すでにコロニーは全滅したものと思われる。

司書官ジョーイ

CONTENTS

宣言文 ····· i
アビス入植への最初の呼びかけ

前書 ····· i
コルビーによる本書の紹介

カビルス卿回顧録 ····· 1
アバタール島の歴史

アビスのコロニー ····· 5
アビス社会の詳しい紹介

この地で求められている者 ····· 13
入植希望者のためのアドバイス

地下世界における魔法 ····· 16
アビスでの魔法の特異性

生物について ····· 19
地下世界で遭遇する生物の紹介

後書 ····· 27
司書官ジョーイによる後書

宣言文

～アバタールの道を歩むすべての修行者へ～

私、カビルスはここに、勇壮な修行の旅に参加される有徳の志を募るものである。この旅は、また、諸君らの謙譲と霊性の徳を磨く絶好の機会となるであろう。

今より数十年前、聡明なる国王ロード・ブリティッシュ陛下は、8つの町を建設され、各町が8つの徳のそれぞれひとつを高めるよう奨励され給うた。そして、我らブリタニア人も、これまで陛下のご意向に沿って暮らしてきたのである。

私、カビルスは、これら8つの徳をひとつの全体として発展させるため、いまこそ新たな町を建設すべき時である、と確信する者である。この新たな町に招き入れる人々として、私は戦士と魔法使いの諸君にまず呼びかけたい。諸君らは、もっとも実直なブリタニア市民である。よって、この崇高なる目的に熱烈な賛同をいただけると確信する。

次いで私は、職人、そして、子供たちにまで呼びかけを広げていく所存である。さらに私は、これまで文明社会にはあまり馴染みのなかった、山岳、森林、沼などに住む少数民族にも、アバタールの道を説くことで、この新しき町の仲間として加わっていただけるものと期待している。

では、この町はいずこに建設されるべきであろうか？緑なす森林地帯か、静寂なる湖水のほとりであるか、はるかな山の高みにであろうか？

私は考える。気高き徳の中心地は、門を閉ざすことで外界から隔離できる場所を選ぶべきではないか。これこそが、全ブリタニア人にとって、もっとも有益となる場所であろう。

新たなコロニーの置かれるべき場所として選ばれたのは、アバタール島の地獄の深淵、つまり"グレート・スティジアン・アビス"である。

ロード・ブリティッシュ陛下の激励をいただいた私は、この崇高なる冒険に全身全霊を傾けることとした。この名誉ある大事業にアバタールの理想を見出し、心がかき立てられた諸君は、ぜひ私のもとに参集されたい。悪の侵入が悲惨な結末をもたらす、との不吉な卜占も立っていると聞く。それならばなおのこと、力をあわせ、共に成功を祈ろうではないか。

前書

私は先日、スティジアン・アビスから脱出し、この書をまとめることができた。私は、故カビルス卿に記録係としてお仕えしてきた者である。私は8つの徳に急がされるがごとくに、我が敬愛する魂の師が書き残され、また話されたお言葉を編纂するという作業に没頭したのだ。

スティジアン・アビスの広大な空間に新たな徳の町を建設するという難事業において、卿は、卓越した勇気と献身性を発揮された。それは、ロード・ブリティッシュ陛下とアバタール殿の身を捨てたご偉業にも並ぶ、高徳な行いだった。

ここに記した内容がすべて真実であることを、我が誠意と正義にかけて、署名を添えて誓うものである。

カビルス卿回顧録

私、カビルスは、私と入植者たちとが新たな町を建設すべく選んだこの島に関する事実を、見聞きしたそのままの形で記録することを決意した。ここに記した内容のほとんどが、すでに常識として広く認識されていることを望むが、いつになく近ごろは、自国の歴史に興味を持つ市民が非常に少なくなっているのが、悲しいかな現実のようである。

アバタールの登場

『アバタールへの道』と題された歴史書でも詳しく述べられているが、アバタール島は第四紀に行なわれたアバタール殿の修行の旅の最後に発見された。ロード・ブリティッシュ陛下の召喚に応じて、別の世界からやって来たひとりの別世界人が、8つの徳の試験に合格し、純粋にして完全なる人格者"アバタール"となられた時代である。

悪の三人組の最初のひとりであるモンデインの頭蓋骨が発見されたのも、アバタール殿の修行の旅が行なわれているときであった。おぞましき頭蓋骨は、世界中の全生命を奪い去るほどの力を持っていたが、それを手に入れたのは、ほかならぬその別世界人であった。不徳な人間の手に渡らなかったことは何よりである。

8つの徳の道を極めたアバタール殿は、次に、人生の究極の答が記されていると言われる聖典"コデックス"の探査に出発された。伝説では、その古代の書は、"グレート・スティジアン・アビス"と深い関わりがあると言われていた。「これまで、ここを詳しく調べた人間はいなかった」と、当時、魔法を駆使してアビスの通路の地図を製作したシャミノは語

っている。「この地獄の底に最初に降りる者を待ち受けている恐怖は、想像も及ばない」とも。

アビスの入口は、ブリタニア本土の南東の海上に浮かぶ未知の島にあった。島は、古代の海賊の亡霊が操る無数の幽霊船によって守られていたが、アバタール殿は幽霊船をかわし、アビスの入口を閉ざしていた謎を解くと、ついにはコデックスの究極の知識を手になさったのである。この名誉ある偉業にちなみ、この島はアバタール島と名付けられた。

平和と反逆

アバタール殿の冒険は大成功に終わり、ブリタニアは再建と統合の時代を迎えた。王国の賢者たちは、アバタール殿が発見されたアバタール島、とくにヒスロスのダンジョンの入口（現在は封印されている）と謙譲の神殿の場所とに注目した。ロード・ブリティッシュ陛下は第二の聖地として、究極の智"コデックス"の神殿を建立された。

一部の学者たちは、島の歴史を調べるうちに重大な事実を突き止めた。アバタール島は、謙譲の徳に欠けた旧マジンシアを滅ぼした、悪魔の生物の棲み家であったのだ。その生物は、謙譲の神殿の守り神と同一の太古の種族であることもわかったが、現在はもうその神秘の姿を見ることはできない。

一方では、コデックスが地下の安置場所から地上に持ち出されたことが、大規模な地殻変動を引き起こしていた。地殻の変動は、"アンダーワールド"と呼ばれる巨大な地下洞窟網を形成したのである。グレート・スティジアン・アビスが、アンダーワールドへの入口のひとつとなってしまい、それが島の火山活動を誘発し、中央火山を噴火させてしまった。

ブリタニアの歴史に刻まれた次なるドラマは、なんとロード・ブリティッシュ陛下ご自身が誘拐されるという恐ろしき事件から始まった（歴史書『運命の戦士』を参照）。誘拐された国王陛下は亡くなられたものと思われ、ブリタニアはロード・ブラックソーン閣下の統治下に置かれることとなった。ただ、ロード・ブラックソーン閣下は高い徳を持ったお方であったにも関わらず、そのときはシャドーロードたちに精神を蝕まれていたのだ。そこで、アバタール殿が再び召喚され、拷問のごとき悪魔との戦いに赴いたのだ。アバタール殿はアバタール島の地下深くに潜り、再度の勝利をおさめられた。

預言の時代

アバタール殿によるロード・ブリティッシュ陛下の救出にともない、さまざまな地質的および精神的な影響が現われた。なかでも、アンダーワールドの崩壊は劇的であった。地下世界にひそんでいたもろもろの生物までが、我々の住む地表に追われてくるようになった。

そんな地下生物に交じっていたのがガーゴイルである。ガーゴイルの賢人の預言によれば、彼らの国を救う唯一の方法は、コデックスを取り戻し（彼らはコデックスの所有権を主張していた）、諸悪の根源（それはなんと、アバタール殿だと彼らは信じていた）を抹殺することであった。ガーゴイルどもは、奸計によりアバタール殿をブリタニアに召喚し、抹殺しようとしたのだ。だが、まさに間一髪のところでロード・ブリティッシュ陛下がアバタール殿をお救いした。

それでも、ガーゴイルがブリタニアの平和を脅かす存在であることに変わりはなかった。アバタール殿には困難きわまりない使命が課せられ、またしてもアバタール島へ向かうこととなったのだ。アバタール殿はガーゴイルに占拠されていた2つの神殿を解放した。そして、溶岩の流出のためにドレークとドラゴン以外の怪物は棲めない場所となってしまったヒスロスのダンジョンの底から船乗りを救出し、彼からガーゴイルの脅威について、計り知れない貴重な情報を得た。

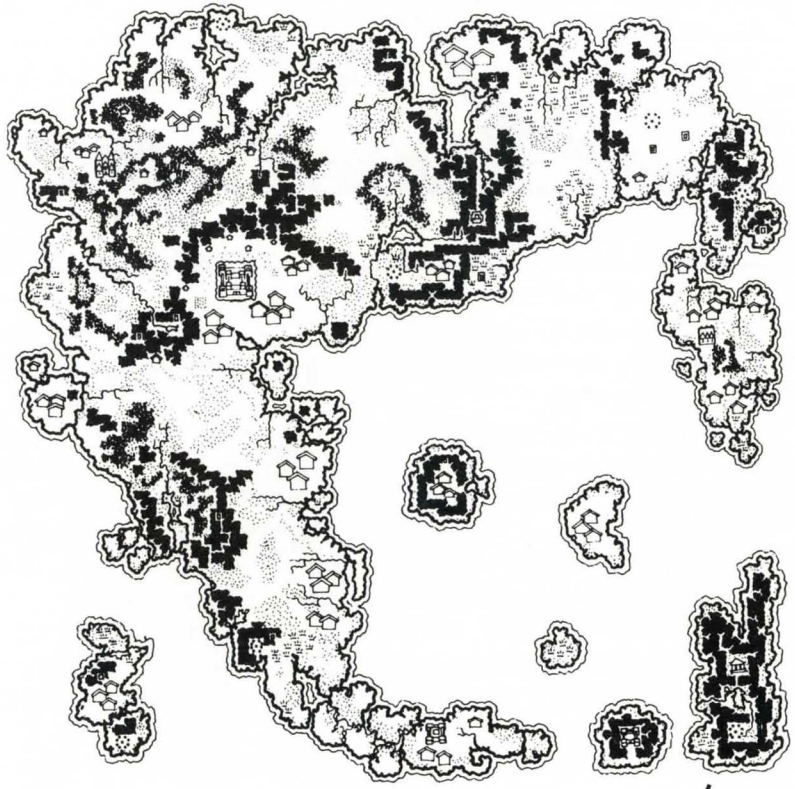
これらの試練を経るうちに、アバタール殿はブリタニアに平和をもたらす唯一の方法に気がつかれた。まずボルテックスの渦の中に究極の智コデックスを置き、ブリタニア側とガーゴイル側にそれぞれひとつずつの魔法のレンズを用意させる。そして、その神秘の書を両方の側からいつでも自由に閲覧できるようにするのだ。

この解決策をアバタール島の神殿で実行することで、アバタール殿はこの世に平和を取り戻すことができたのだ。

それから10年後

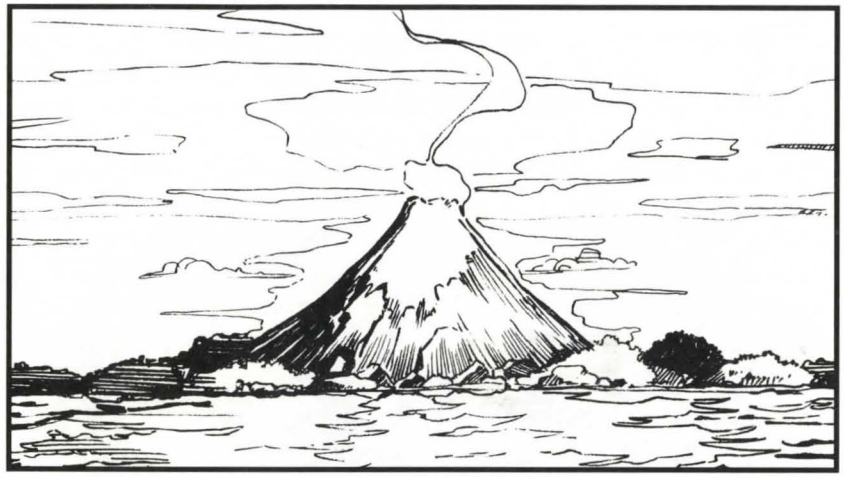
アバタール殿は現在、ご自身の故郷にお戻りになられている。私たちは、8つの徳に自らの身を捧げることによって、未来を切り拓かなければならない。そこで、私、カビルスは、ブリタニアの神秘の力が収束する地点のひとつ、アバタール島はグレート・スティジアン・アビスの内部に、新しい徳の町を建設しようと決意したのだ。

ブリタニアの地図



アバタール島

アビスのコロニー



5年前、ロード・ブリティッシュ陛下の勅許を得た私は、入植者たちと船に乗り、アバタール島に向かった。今でこそ短く感じられるあの困難な航海の末、私たちは、陰鬱にそびえる島影を波の彼方に見た。

私たちは、島に真っ直ぐ針路を取った。上陸すると2つの神殿に立ち寄って祈りを捧げ、ヒスロスのダンジョンを封印した。こうして、戦士、魔法使い、そのほかの開拓者で構成された私たち一団は、伝説のアビスに足を踏み入れたのだ。

火山の噴火と地震によって、そこに棲んでいた肉食の危険な生物はほとんど姿を消しており、火山活動もすでに落ち着いていたので、比較的安全に住めると確信できた。それでも、戦士たちは、彼らの武勇を試すに足る数多くの戦いに出会ったのである。

ロード・ブリティッシュ陛下は、ブリタニアのほかの地域との連絡が取れるように、島の地上にも村を作ることを要求された。村の責任者には、宮廷の狩猟頭、アルムリック男爵が任命された。男爵は、とりあえず粗末な石の塔を建てたが、あと数年で小さな要塞が完成することになっている。

ロード・ブリティッシュ陛下は、すぐにでも我々に大評議会の議席をくださるだろう。それによって、我々は8つの徳の町と同等の地位を得ることになる。それも、力を合わせてこのコロニーを完成させた、騎士、山人族、魔法使い、リザードマン、ゴブリン、トロルなどの、本質的に種族の異なる同士が結束した結果にほかならない。

クラックスの騎士たち

アビス入植の呼びかけに、まっ先に応募してきたのがジェロームの騎士たちだった。勇敢な人生を目指すよう、ロード・ブリティッシュ陛下のご指導の下に発展したジェロームの出身者たちは、武勇なくしては成功しないこの計画に魅せられたのだろう。

騎士たちはここで、クラックス・アンサタ騎士団を結成した。クラックス・アンサタとは、古代の言葉でアンクを意味する。彼らはこの騎士団を、かのシルバーサーペント騎士団にも匹敵する騎士団に育てようと張り切っている。ゆくゆくは、道場や寄宿舎を各地に建てて若い入団希望者を募ることとなるだろう。が、現在はまだ粗末な施設しか持っていない。

戦士と魔法使いは、伝統的に敵同士というわけではないが、ブリタニアでは、しょっちゅう小競り合いを起こしてきた。しかし、ここでは違う。クラックス・アンサタ騎士団は、魔法使いの魔法照明や治療に大きく依存しているからだ。したがって、アビスでは騎士と魔法使いは、和気あいあいとした同盟関係にある。

彼らはまた、彼らの肉体に染み込んでいた偏見を捨て、古代からの宿敵であるトロルやゴブリンやリザードマンとも友好関係を結んでいる。クラックス・アンサタ騎士団には大変に厳格な規則があり、わずかに抵触しただけでも、償いの苦行に出なければならない。規則運用の権限は騎士団師範だけが持ち、苦行の種類は違反の大きさに応じて決定される。そして、師範の決定には絶対に従わなければならないのだ。

この規則も手伝って、この騎士団の騎士たちは、アバタールの道を厳格に擁護している。コロニーで最初の裁判所を設立したのも、最初の犯罪者を裁判所に送り込んだのも彼ら騎士団だった。

山人族

私たちのコロニーは新しき試みの場所であったが、とくにブリタニアの山人族たちにとっては冒険の場となった。

背が低く片幅が広い山人族は、かつて"ドワーフ"という名で知られていたが、彼ら自身はその呼び名を大変に嫌っていた。山人族はとても変わった生活様式を持ち、とくに職人気質を大切にする民族である。ただ、過去数世紀にわたり他民族との交流を拒絶してきたことと、何よりも貴金属を愛するという性格のゆえに、山人族は他民族によい印象を与えていなかった。しかし、ここ数百年、彼らのなかにも古い因習を捨てて故郷を離れ、他民族と結婚する者が増えてきた。

アビスの入植計画に参加したいという手紙が、山人族の長から届いたときは、私もいささか驚いた。山人族が彼らの伝統文化と共に生存の危機に瀕していることを知ってはいたが、このコロニーでの他民族との共同生活に山人族の長が同意するとは、まったく思いもよらぬことであった。しかし、結果として、私たちは、誰とでも仲良く生活できるということを証明した。

山人族の長、ゴールドソードは、大変な頑固者だが、山人族の人々をじつに効率的に指導している。アビス内部の岩石をうまく利用して自分たちの居住区を建設させているのだ（アバタール島が海中から隆起したばかりのころ、現在のアビスの元になった地下通路を作ったのは山人族だった、と主張する歴史家もいた）。

山人族は、非常に親しみやすい人々であることがわかった。騎士や魔法使いともうまくやっているようだ。さらに、古くからの宿敵であるトロルたちとの同居も実現している。

ムーンストーン友愛会の魔法使い

ベリティー島の南端に位置するムーングロウは、ブリタニアの魔法使いによって、誠実さの徳を磨くことを目的に建設された町だ。この町の魔法使いたちも、アビス入植に真っ先に参加を表明してくれた。アバタール島への最初の航海には、ひとつの分派がまるごと私と同行してくれたほどである。

ここで彼らは、独自の魔法使い結社を結成し、"高徳啓発ムーンストーン友愛会"と命名した。彼らは、とくに山人族と親密な関係にある。なぜなら、アビスの岩石を使って彼らの居住区を作ってくれたのが山人族だったからだ。

コロニーの魔法使いたちは、この地下社会でもっとも重宝される、照明や食糧や住環境に関する魔法に磨きをかけていった。さらに、アビスで採取できる物質を秘薬とする魔法実験を繰り返している。我々の探検隊も、彼らの依頼を受けて、あらゆる物質の標本を持ち帰っているのだ。

（魔法使いたちは、彼らの研究について私に直接話すことはないが、折に触れて洩れ聞くところによると、8つの徳の精神に啓発されてアビスにやって来た魔法使いもいるにはいるが、ほとんどの魔法使いは魔法実験が目当てのようだ。ブリタニアのなかでも、アビスは非常に特異な地域であり、次元間の壁が非常に薄いらしい。---コルビー注）

リザードマン（トカゲ人）

"暗黒時代"とは、かの三大悪魔がブリタニアを暴れ回った遠い過去の時代のことだ。ロード・ブリティッシュ陛下がこの国を初めて訪れ給うたのも、ちょうどその頃だった。まさにそれと時期を同じくして、モンデインの事件が起きたのだ。自らの神秘の術を完成させた若き魔導師モンデインは、実父を殺害し、魔力を秘めた宝珠を奪い去った。モンデインは宝珠を邪悪な目的に悪用し、全ブリタニアを相手に、突然、陰湿な戦いを開始したのだ。

彼が行なった数々の実験のなかでも、もっとも忌まわしいものに、人間の体と、南部沼沢地方の大型爬虫類の体とを魔法の力で結合させる術というものがあった。このおぞましき魔法実験の結果、さまざまに不気味なトカゲ類が生み出された。その一部がリザードマン（トカゲ人）として生きながらえたのである。

モンデインが倒されたあと、リザードマンたちは狩り出され、滅ぼされてしまったはずだった。ところが、このアビスの洞窟の中には、彼らの最後の生き残りがいたのである。私たちは、慈悲の徳に突き動かされて行動した。この哀れな生き物たちを退治するかわりに、アバタールの道を説いて聞かせたのである。リザードマンたちは、話すことはできないまでも、私たちの共通語を何とか理解できるまでになった。

現在、リザードマンとゴブリンとは、アビスの多湿地帯で共存している。また、山人族とはよきライバルとして平和的な競争を行っている。山人族は湿気を嫌うので、リザードマンがいなければ、水路を掘り、アビスから湿気を排除してしまっていただろう。

ゴブリン

そもそもゴブリンは、己が力に酔いしれて権力を欲した魔法使いが生み出したものである。囚人や哀れな犠牲者の体が、禁断の実験のために使用された。このようなことが二度と起きないように、ブリタニアではこの手の魔法が禁止された時代もあった。

第三暗黒紀に、かのエクソダスはこのようなゴブリンを次々と生み出し、軍隊を組織した。だが、エクソダスが倒されると、生き残ったゴブリン達は、ブリタニアからは姿を消してしまった。人間に狩られたか、別の次元に消えてしまったかと思われたのだ。当時のゴブリンは、この三次元空間では非常に不安定な存在だったので、ごく簡単な呪文で消し去ることができるほどだったのだ。

「アバタールの道に進むつもりなら、未開の非人類に対しても門を閉ざすものではない」私たちがそう宣言した直後、彼らは現れた。ゴブリン族の名代がロード・ブリティッシュ陛下に謁見を求めてブリタニア城へ参内したのだ。陛下にまみえることができたのは、エクソダスの時代からの2つの種族である。ひとつは山岳民族を先祖に持ち、サーパンツ・スパイン山脈に隠れ住んでいたグレーゴブリン族。もうひとつは有毒の湖、ビーノム湖近くの地下河川に身を潜めていた森の住人、グリーンゴブリンである。

現在では、高い徳を持つゴブリンたちは、コロニー人口の3分の1を占めるまでになった。過去の一時期においては、グリーンゴブリンは、「他のいかなる敵よりも多くグレーゴブリンを殺害した」、と言われるほどの種族であった。だが、アバタールの道の教えによって、兄弟として共存する道に目覚めたのだ。

（今では、2つの種族が衝突することはほとんどなくなったが、それでも徳の道の許す限り、互いを出し抜こうと機会を狙っている。長年のわだかまりは、そう簡単に消えるものではない。……コルビー注）

トロル

私が育った地域では、トロルが旅人を待ち伏せして襲うことは珍しい話ではない。正義によって捕えられた山賊トロルが、道端の十字架に吊られているのを、何度となく見ている。そのため、慈悲の神殿を訪れるまでは、トロルがこれほどまでに文明化されているとは知らなかった。彼らは、高度な武器を持ち（人間から盗んだものだが）、ぼろ布や動物の革を身につけ、ごく片言ながらも私たちの共通語を話していたのだ。

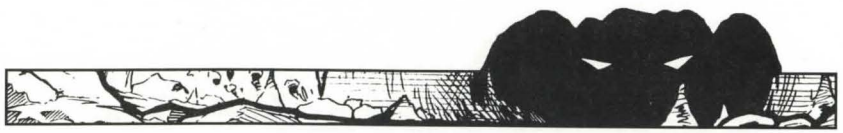
トロルに興味を持った私は、さっそくベリティー島のライキューム図書館を訪れた。そこでわかったことは、トロルはかつて山に住んでいたということ、常に文明に引き寄せられる性質があるということ、などだった。事実、彼らは道端や橋の下にいることが多い。そして私は、トロルこそアバタールの道に導くべき種族だと確信したのだ。

2年間をかけ、従者と私は、ブリタニア中のトロルに呼びかけてまわった。アビスの偉大なる試みに参加せよと。

トロルたちの多くは拒絶した。なかには、自己防衛のためにやむを得ず斬り捨てたトロルもいた。だが結局、トロルは私たちの精神を受け入れ、今では私たちの社会のなくてはならない一員になっていることを、私は誇らしく思う。

他の住人にトロルを受け入れさせることが一番困難であった。騎士たちは、トロルを見たら斬り殺せという教育を、幼いころから受けてきたし、ゴブリンの肉はトロルの大好物ときている。それでも、徳がすべてを丸く納めてくれている。

（ゴブリンの肉を食するという罪を犯したトロルは、即刻、追放された。ただし、逮捕できればの話だ……コルビー注）



流刑者

この部分は、真実と正義のために私が書き添えたものである。カビルス卿ご自身の記述では、流刑者についての記述がない。意図的にお避けになられたわけではなく、単に書き落としたのだと私は確信している。‥‥コルビー

入植者のなかには、アバタールの規範に従って生きることができない者、あるいはそのように生きようとしない者もいる。暗く苛酷なアビスでの生活に挫折してしまった者もいるし、8つの徳に目覚めて悪の道から立ち直ったものの、薄弱な意志のために、再び悪に転落してしまったという者もいる。「アビスという空間自体に、人間の品位を落としめる何かがあるのでは？」という説に対するカビルス卿のご意見は、単なる表面的現象にすぎない、というものであった。

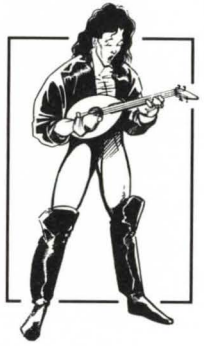
ほかの入植者と協調できない者たちは、隔離区域への移住を要請される。要請を拒否すれば、剣の力により、強制的に流刑に処せられた。ほとんどの流刑者はアルムリック男爵の砦に集められ、そこから船で本国に送還された。

なかには、一般の入植者が行かないアビスの下層部に降りていく流刑者もいた。深部を探検した騎士によれば、そこにはネズミや虫を食べて細々と生きている、"グール"と呼ばれる人々がいるという。騎士たちの説明によれば、彼らの肉体は退化し、もともと異なる人種、異なる肌の色をしていたにも関わらず、みな似通った恐ろしい外観に変わってしまっているという。

しかし、この手の話は怪物話が好きな人々が、酒の席で面白おかしく誇張して言った産物であろう。

この地で求められている者

ここでは、私たちのコロニーにふさわしい入植者を求めるものである。アビスの環境はいまだ苛酷であるため、軟弱な体では生活できない。また、戦いの心得も多少は必要となる。そこで、特に次の8つの職業に属する人々を求める。



吟遊詩人：吟遊詩人が奏でる楽しい音楽と、語られる物語とが、厳しい生活を送る住人たちの心をいやすだろう。なによりもこのコロニーには、新しい詩の種が転がっている。

アバタール島を目指す吟遊詩人は、武勇の詩を詠うだけでなく、自ら武勇を実践する必要がある。吟遊詩人と言えば、スリングやクロスボウの達人であるばかりか、魔法の能力にも優れていると聞くが、それらの技能が、ここでは大きな助けになってくれるはずだ。

ドルイド：ドルイド僧の一団も、ぜひアビスのコロニーに来てほしい。その神秘の力をもって、聖なる木立をこの岩屋の中にも根付かせてほしいのだ。ドルイド僧が得意とする、弓矢とメイスの技は、ここで大変に役立ってくれるだろう。また、金属の防具を嫌うという習慣も、ここではかえって好都合だ。岩の通路は音を反響させるので、金属の防具を着けているとやかましくていけない。

戦士：アビスに入植したいと考える戦士諸君は、ここの戦闘集団であるクラックス・アンサタ騎士団の入団テストに備えておく必要があろう。いずれは騎士となることを望む者なら、日夜、格闘技の鍛練をつみ、あらゆる武器と防具の使用に長けているはずだ。ちなみに、クラックス騎士団では、アビスの狭い空間で戦うのにもっとも適しているとして、両刃のブリタニアン・ソードをとくに好んで使用している。

ここでは馬に乗ることができない。馬を育てる餌も休ませる馬屋もないためである。愛馬は置いてきてほしい。また、クラックス騎士団では、魔法の修行は戦闘エネルギーの浪費であるという主張を通している。魔法は魔法使いに任せるというのが、彼らの考えだ。

魔法使い：このコロニーに住みたいと希望する魔法使いは、アビス唯一の魔法使い結社、"高徳啓発ムーンストーン友愛会"の入会条件を満たせる技能が必要だ。身につける防具はなるべく布製のものを、という規則が彼らにはある。また、スタッフ、スリング、ダガー以外の武器は携帯しないことになっている。もちろん、魔法の武器はこの限りではない。もっとも、各魔法使いがどんな防具、どんな武器を装備しようとも、基本的には個人の自由である。それを規制する法律はどこにもない。友愛会のなかでも、若い魔法使いなどは、自分で扱える最大の武器を持ち、最強の防具を着たがる傾向にあるようだ。それでも、友愛会の規則は、魔法使いは己の本分である魔法に集中すべきだとの規範を示している。

パラディン：最近になって私は後悔している。なぜもっと諸君に移住を呼びかけなかったのだろうかと。魔法と戦闘の両方に豊かな経験を持つパラディンは、大いに私たちの役に立ってくれたはずなのだ。その高い戦闘力により、私たちの貴重な同志になってくれただろう。

レンジャー：ドルイド僧の入植により、アビスに森を作ることに成功したなら、森に住む人々も呼ぶことができる。危険な肉食生物を狩り立てるときなど、レンジャーがいてくれたら、とつねづね思っていた。アビスで出会う珍しい生物の対処のしかたなどにおいては、森で培われたレンジャーの素養が貢献してくれるものと期待している。

羊飼い：私は以前から、アビスで羊を飼えないものかと思案していた。そのため、羊飼いの諸君には、ぜひ集まってほしいと考えている。羊飼いのなかには、特定の武器や魔法に長けた者もいて、その技能は個人個人で大きく異なると聞く。だが、羊飼い全員に共通しているもっとも重要なことは、その非凡な謙虚さにあろう。ここでは謙虚な人ほど喜ばれる。

職人：コロニーでは、金属製または木製の道具の修理ができる職人が不足している。特に、武器の修理ができる職人がはなはだ不足しているのだ。ここの環境を考えると、戦士としてのたしなみがあることが重要である。職人は魔法使いを嫌うという有名な話もあるが、アビスの魔法使いは滅多に他人に干渉することがないから、その心配は無用だろう。

地下世界における魔法

アビスに住み始めて1年間、魔法使いたちはこの不思議な世界での魔法の特性について学ぶことが多かったようだ。ここでは、これから私たちと生活と共にしたいと思っている魔法使い諸君のために、基本的な説明を行なう。アビスでは役にも立たない秘薬などを、大枚はたいて買い込んで来ないよう、くれぐれも注意されたい。

（私の素養と知識ではまったく太刀打ちできない部分を解説してくださった友愛会のダンロック氏に感謝する）

魔法の歴史

かつて"恐怖の術"として恐れられていた魔法が、私たちがブリタニアと呼ぶ世界で失われかけた一時期があった。その事実を知るブリタニア人は、現在では少ないだろう。古代都市国家の支配者たちが、強力な呪文の力で悪が成長するという事実を知り、魔法の使用を厳しく禁止してしまった時期があったのだ。

しかし、この法に屈しないひとりの若者がいた。

彼の名はモンデイン。第一暗黒紀を招いた暗黒の魔導師である。モンデインの悪の力に対抗し、モンデインを倒すために、善良な市民のグループが立ち上がった。そして、久しく使われることのなかった魔法の古書が書庫から下ろされたのである。

モンデインが倒され、すでに数世代を経ているにも関わらず、呪文の知識で武装した

悪の力は、いまだに私たちの平和な世界にとっては脅威である。その邪悪な力に対抗するため、私たちの魔法使いは、研究に研究を重ね、呪文の種類も効力も進歩させている。

アバタールの道を歩む魔法使いは、自らの魔法の力は社会のために使われるべきであるという重い責任感を抱いている。魔法使いがもっとも大切にする徳は、誠実さだ。幻想や混乱に惑わされては、魔法を操ることができないからである。彼らは、真実の世界をあるがままに見据える目を持たねばならない。自分の力の限界を正しく認識し、不埒な野望に惑わされないでいることが必要だ。私利私欲や、復讐のために使う魔法は、己を傷つけることがあるからである。

魔法の修練は多岐にわたる。どれをとっても常識では考えられない世界だ。このため、この世で最高の力を持つ魔法使いといえども、学ばねばならないことが山ほどある。魔法のエネルギーは、術者を中心にした8層のサークルを形成している。サークルは目に見えない拘束力でその形を保っており、魔法使いの能力に応じて、各エネルギー・サークルの魔法を使うことができる。8層すべてのエネルギー・サークルの力を駆使できるようになるためには、修養を積むしかない。

どのレベルのサークルのエネルギーを使う場合でも、コントロールするには、魔法の詠唱が必要になる。呪文を正しく詠唱できなければ、エネルギーを正しく放つことはできない。

ルーンによる魔法

最初に入植した魔法使いたちは、しばらく暮らすうちに、アビスでの魔法の法則が、外の世界で常識となっていた魔法法則にまったく当てはまらないことに気がついた。

歴史を学んだことのある者なら、数々の大規模にして劇的な歴史的事件が、このグレート・スティジアン・アビスから始まったということを知っているだろう。事実、この島も、アビスも、魔法のエネルギーによって生み出されたものなのだ。そのように膨大な魔法のエネルギーが、過去において放出されたことで、この時空間と別の次元との境界は摩耗して薄くなっているらしい。その結果、別の世界の法則が入り交じって魔法の原則を打ち消しているのだ、というのが、通説になっている。

まず第一に、アビスでの呪文の詠唱には秘薬を必要としない。硫黄の灰も、人参も、蜘蛛の糸も、ナイトシェードも、黒真珠も、血の苔も、ニンニクも、ここへ持ってくる必要はまったくない。ここでは、秘薬を調合する必要もまったくないのだ。

第二に、呪文の書も家に置いてきてかまわない。魔法使いたちは、アビス独特の魔法のかけ方を発見したのだ。その方法では、あの重くてかさばる魔法の本を持ち歩く必要がないのである。

アビスのいたるところに、魔法の力が封じ込められた"ルーンストーン"と呼ばれる不思議な石がある。それぞれの石には、その力の特性を表わすルーン文字が刻まれており、それが地上における魔法の詠唱の役割を果たしてくれるのだ。したがって、呪文を構成するルーンストーンを揃えるだけで、どんな魔法でもかけることができる。ただし、術者のレベルによって使える呪文と使えない呪文とがある。

第三に、ルーンストーンは適切な容器に入れて初めて、その効果を発揮する。友愛会の魔法使いたちは、そのための特別なルーン袋を作り、アビスに来た魔法使いに配っている。

第四に、地下の魔法使いは、かけようとする魔法に見合うだけのレベルに達していなければならない。ここでは、すべての条件が正しく整っていても、呪文に失敗することがある。術者自身の能力の不足が原因だと言われている。

最後に、ルーンストーンを使う魔法でも、地上と同じくマナが必要だ。このエネルギーが体内に蓄積されていない限り、魔法使いは呪文を唱えることができない。マナは眠っている間に蓄積される。また、魔法の巻物のような特別な道具によって補給することもできる。

生物について

私たちの社会に加わりたいと思うなら、アビスにはさまざまな危険な生物が棲息していることを、ぜひ認識しておいてほしい。その種類や頭数は多いものの、騎士の剣にかなうほどのものではない。

（と、騎士たちは豪語している。……コルビー）

コウモリ

病原菌を媒介する小型動物だ。地下世界のいたるところで繁殖する。見かけは鳥のようだが、羽毛のかわりに短い毛が全身をおおっている。一般的にコウモリは、集団で行動することが多く動きも素早いため、これに襲われた場合は撃退が難しい。

騎士たちの報告では、アビスには2種類のコウモリがいるという。そのひとつの"洞窟コウモリ"は、比較的穏和な種類として知られている。洞窟コウモリのほうから人間を襲うことは滅多にない。全身が真黒であるため、暗い洞窟内で目撃することは難しいが、仲間同士の連絡に使用する特有の高い声で、彼らの存在を知ることができる。

もうひとつの"吸血コウモリ"は、常に人を襲おうと狙っている狂暴なコウモリだ。全身が赤い毛でおおわれているので、洞窟コウモリとは簡単に識別できる。人を襲うときは、頭上から降下してくるので、足元の穴や黄金などに気を取られていると、まったく気がつかないうちに襲撃されることがある。吸血コウモリは毒を持っているので、それに咬まれると、皮膚を通して毒が体内に流れ込む。十分に注意されたい。

ブラッドワーム

気味の悪い緑色の巨大な環節動物だ。ブリタニアで多く見られるロットワームの遠い親戚にあたるが、非常に攻撃的で、体長もロットワームの10倍前後にまで成長する。

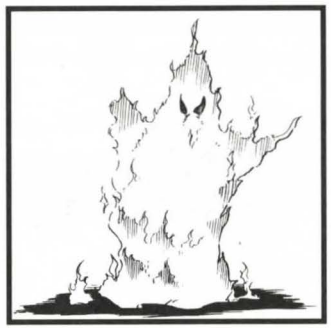
ブラッドワームの巣に踏み込んだことのある騎士、ブラドリック卿によれば、ブラッドワームはロットワームのように簡単には退治できない相手である。卿は常に有利な位置を維持しながら、なんとかその場

を脱出したという。しかし、無心に追跡してくるブラッドワームについには追い付かれ、しかたなく相手を全滅させたのだが、残念なことに、最後にはブラッドワームの毒に冒されて彼自身も命を落としてしまった。

卿は死を目前にしてこの事実を伝えようとした。ブラドリック卿のノートが発見されたのは、つい最近のことである。しかし、勇敢なる騎士の遺体は、ついに発見されなかった。

ファイアーエレメント

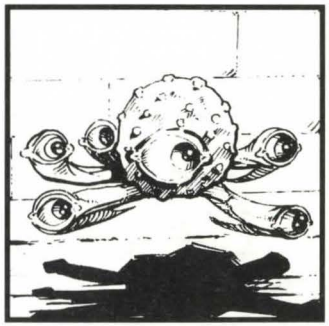
前時代の火山の噴火によって生まれた炎の生き物。アビスのなかでも、もっとも手強い敵の一種だ。まず、彼らは自分の体の一部を投げつける。生命を持った炎の球を敵に投げつけるのだ。そして、炎の腕を伸ばして素早く敵を攻撃し、敵の攻撃を身軽にかわしてしまう。かなりのダメージを受けても平気な顔をしているという、なかなかの戦士だ。数回の攻撃を受けただけで、普通の人間なら命を落としてしまうと言われるほど強力な敵でもあるが、距離を置いて静かに歩けば、彼らに気付かれずに通り過ぎることも可能だ。

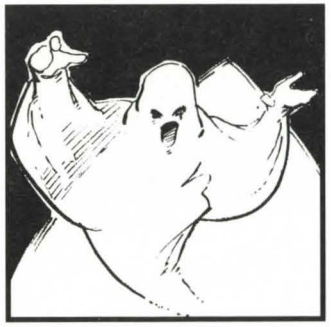


（ファイアーエレメントはかなりの近眼だと言われている）

ゲイザー

これが魔法によって生み出された生物であることは、一目瞭然である。自然の摂理がこのような姿の怪物を創るとは考えにくい。ゲイザーはアビスの通路の空中に浮遊し、縄張に侵入する敵を、無数の眼球で素早く察知する。その狂暴性を甘く見てはいけない。中央の大きな眼球のまばたきひとつで、あるいは、眼球のある触手をひと振りするだけで、敵の肉体を剣のごとくに斬ると言われている。おまけに、狙いを外すことは滅多にない。





幽霊（ゴースト）

友愛会の魔法使いたちは、地下世界で数種類目撃されている半物質的存在を説明できずにいる。これがブリタニアの死者の霊なのか、単に半物質的生物なのか、私にもわからない。一般的な幽霊は、熟練した戦士にとっては恐れるに足る存在ではない。2～3撃で簡単に霧散してしまうからだ。幽霊が反撃するひまもなく、一瞬にして勝負がついてしまう。

しかし、そう数は多くないが、危険な幽霊もい

る。"白幽霊"は、一般の幽霊と違って半透明で、まぶしいほど白く、より実体に近い。それだけに倒しにくい相手だ。白幽霊が十分に反撃できるだけの時間を与えてしまうことにもなる。

これまでに知られているもっとも危険な幽霊は"死霊"だ。夜の闇のように黒く、影のように実体がない。攻撃を受けるまで、その存在を察知することは難しいが、攻撃を仕掛けてくるとき、その目が金色に輝く。友愛会の魔法使いムーンウェインは、死霊のすざまじいばかりの狂暴さから見て、それは殺された怪物の念が残留したものではないかと説明している。

大ネズミ

ここ数世紀にわたって、ブリタニアの嚙歯類は、ブリタニアの各地に点在する地下墓地やトンネルなどで大型化し、貪欲さを増している。持ち前の敏捷さと鋭い前歯が彼らの武器だ。軽装の人間にとっては、たとえ1匹でも非常に危険な存在だが、熟練した戦士であれば、群に襲われたとしても難なく対処できるだろう。

アビスに棲息する大ネズミは、大きく2つの種類に分類される。大褐色ネズミは、アビスの上層部に棲み、敵に飛びついて鋭い歯で喉を掻き切るという恐ろしい戦術を使う。

"大灰色ネズミ"は深層部に棲み、上層部から流れ落ちてくる残飯などを食べて生きている。何世代にもわたって続いたこの食生活によって、大灰色ネズミは毒性の強い雑菌を保菌している。そのため、噛まれると病原菌を伝染させられてしまうのだ。騎士たちが大灰色ネズミと戦うと、かならず伝染病に感染する者が出るという。しかし、毅然として立ち向かえば、追い払うことも可能だ。

ゴーレム

この怪物が、アビスの中で自然に発生したものなのか、暗黒の勢力による魔法実験で生み出されたものなのか、もっとも学のある人間にもわからない。わかっているのは、ゴーレムは人間を見るとかならず襲いかかってくるということと、これまでゴーレムを倒すどころか、ゴーレムにダメージを与えた人間はひとりもいないということだけだ。ゴーレムは、体を構成する素材の違いから次の3種類に分類される。

"アース（土）ゴーレム"は、土の塊からできた茶色いゴーレムだ。ゴーレムのなかではもっとも小さいが、完全武装した戦士も刃が立たないほどの力を持っている。騎士ギャロウェイは、迷路に足を踏み入れたときにアースゴーレムに遭遇し、逃げてきた経験がある。彼の報告では、ゴーレムは視覚で敵を追跡するが、耳はあまりよく聞こえないとのことだ。

"ストーン（石）ゴーレム"はアースゴーレムよりも大きく、灰色をしているのですぐにわかる。ストーンゴーレムが2回手を下ろすまでに、たいていの人間はやられてしまうという。剣では何回斬りつけても傷つかないと知っている騎士たちは、ストーンゴーレムに対してだけは集団で飛びかかることにしている。

もっとも恐ろしいのは、"アイアン（鉄）ゴーレム"である。錆びの浮いた鉄の体をしているので、これもすぐにわかる。アイアンゴーレムに対抗できる武器は非常に限られている。ほんの一撃で、戦士などはひとたまりもなく殺されてしまうだろう。騎士ギャロウェイの報告によれば、アイアンゴーレムはほとんど目が見えないそうだ。しかし、ギャロウェイ自身がアイアンゴーレムに殺されたことで、その説は疑問視されている。

ヘッドレス

同じ二足歩行する生物の仲間として、頭のない彼らの姿は異様で哀れに思えることもある。だが、同情などすれば彼らの思う壺だ。ヘッドレスは考えることなくやみくもに攻撃をしかけ、自分自身の生命が危うくなる間際まで、けっして攻撃の手を緩めない。目も耳もないが、どうやって敵を追跡できるのかは、今でも謎に包まれたままだ。ヘッドレスの群に出会ったとき、静寂と安全な距離を保つことで彼らに気付かれずに通過できることがある。

インプ

この忌まわしい悪魔的生物は、私たちの徹底したジェノサイドによってブリタニアから一掃されたと思われていた。が、ここアビスにまだ生き長らえている。インプは、悪魔や猿や、そのほかの生物（緑色の体色から察するに、複数の未知の生物が考えられる）とが合体した集塊状生物だ。比較的広い空間のある場所に棲息し、頭上を飛びながら人間を嘲笑する。そして、魔法の稲妻で連続的に攻撃してくるのである。

じつにやっかいな生き物だ。私たちは常に悩まされ続けてきた。しかし、地上に引きずりおろしてしまえば、簡単に倒せる。もし、そうできたなら、の話だが。

ラーカー

危険と言うよりは、"うるさい"というイメージが強い。アビスの地底湖や水路に棲息し、地上ではほとんど見かけない。普段は水面近くに浮かんで、目と黄色い触手の先端だけをゆらめかせている。水泳中にこのラーカーに追いかけられた事例と、大型化したラーカーが岸の人間を襲った事例とが報告されている。

騎士ウィロマールは、深層地区で非常に凶暴なラーカーに遭遇したと報告している。そのラーカーに限って凶暴だったのか、凶暴なラーカーの亜種がいるのかは不明である。ただ、深層地区のラーカーは非常に大きい。また、深層地区のラーカーは緑色をしているので、一般のラーカーとはすぐに区別ができる。ウィロマールは傷が癒えるまでに相当長い時間を費やした。一時は原因不明の高熱にうなされ、脳にも毒が回るほどだったという。だが、その病原がラーカーからの感染によるものか否かは定かではない。

モングバット

モングバットは、インプよりもたちが悪い。おそらく、私たちの地下社会で最も激しく嫌われるものであろう。茶色の体毛でおおわれ、コウモリと猿の合いの子のような姿をしている。頭上から降下して敵を襲い、一瞬のうちに間合いの外へ飛び去ってしまう。実に狡猾な生物だ。しかも、動きが非常に敏捷なため、地上に引きずりおろしても剣を当てられるかどうかわからない。できることなら、このアビスから一掃してやりたい生物だ。

リーパー

最初にリーパーが生まれたのは、呪われた森が古代の地殻変動のために地底に飲み込まれたときだと言われている。それ以来、この激しく触手を動かす神秘の樹木は、地下世界で宝を溜め込んだり、自らの縄張を守ったりしてきた。ブリタニアの一般的なリーパーが自由に移動できるのは、その一生のうちでほんの一時期に過ぎないが、アビスに棲息する種類は、ゆっくりではあるが、いつでも自由意志で移動ができる。長い枝を振り回す攻撃では、敵に命中する確率はさほど高くない。だが、命中したときのダメージは、いかなる剣の攻撃よりも大きい。そのため、経験の浅い戦士は、リーパーとの接触を極力避けるべきだろう。

ロットワーム

汚物と腐臭と病原菌に満ちた地底の闇のなかに、ロットワームは巣を作って繁殖している。ロットワームは近付く外敵を察知すると、かならず攻撃をしかけてくる。十分に装備を整えた戦士にとっては、たいした敵ではないが、軽装の冒険家にとっては、その圧倒的な数が脅威となろう。

シャドービースト

この生き物の実体は、ほとんど知られていない。なにせ目に見えない相手であるから、どれほどの数が存在するかもわからない。シャドービーストは、1人の戦士ではとても対抗しきれないほどの力を持つと言われている。目に見えない何者かに攻撃を受けたときは、まず頭上を見て、飛行生物による攻撃かどうかを確かめること。次に足元を見て、地面に這う毒虫によるものかどうかを確かめること。もし、どちらでもなければ、相手はシャドービーストだと考えられるので、全方向に攻撃をすることだ。

スケルトン

おそらく、アビス特有の神秘の力で生み出された不死人であろう。アビスのいたるところで目撃されている。岩の壁から這い出してくると言う者もいるほどだ。スケルトンは普通、集団で行動している。そのため、1人に出会ったなら、近くにかならず仲間が大勢いると思って間違いない。スケルトンは生きている者を忌み嫌っている。しかし、幸いなことに、戦士としての腕は悪く、攻撃力は低い。

ナメクジ

ブリタニアで多く見かける普通のナメクジと混同してはいけない。アビスのナメクジは、ゼラチン質の無定形生物なのだ。知能は低く、高等な神経活動は限られているが、動くものを追跡するという貪欲な好奇心に、その全身が満たされている。目も耳もないので、仲間同士で追跡の相手を取り違えるような混乱もしばしば起きる。これは私たちにとっては、ありがたいことだ。

アビスでは、2種類のナメクジが確認されている。ひとつは"肉ナメクジ"だ。その体色が生の肉に似ていることから、こう呼ばれている。もっとも多く見かけられる種類で、危険性は低い。肉ナメクジが敵に咬みつくような攻撃を見せるかどうかは、まだ確認されていない。また、攻撃的な動作を見せたという話も聞くが、単に身をよじったところにぶつかっただけとも受け取れるのだ。ともかく、経験を積んだ戦士であれば、まったく恐れることはない。

しかし、緑色をした"酸ナメクジ"には注意が必要だ。肉ナメクジよりもひとまわり大きく、濃縮酸を霧状にして敵に吹きかけ、相手に不快感を与えることがある。しかし、その恐ろしい名前とは裏腹に、毒は持たない。なお、念のために述べておくが、食用には適さない。

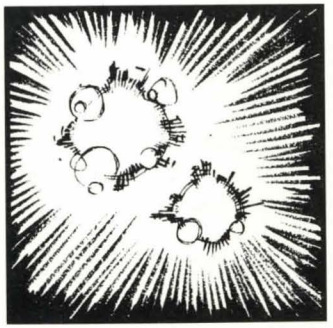
蜘蛛

アビスに棲息する蜘蛛類は、巣を張らずに生きた獲物を求めて歩きまわる。もっとも一般的に見られる"大蜘蛛"は灰色をしていて、大きさは大型犬とポニーの中間ほどもある巨大な蜘蛛だ。2匹以上で行動することが多いため、普通の人間にとっては、非常に手強い相手となる。丸く大きく膨らんだ腹部と短い足からは想像しにくいが、大蜘蛛は、突然、相手に飛びかかってくるので注意が必要だ。

それよりも小型で、赤い体色をしている種類は毒を持つ"狼蜘蛛"だ。これらの大型の蜘蛛を倒すことは比較的簡単だが、狼蜘蛛の場合は、死ぬ前にかならず相手に咬みつき、強力な赤い毒液を体内に注入する。多くの騎士は、狼蜘蛛は比較的おとなしい生物だと考えているが、騎士バイタラールの報告では、彼の姿を見るなり、狼蜘蛛が襲いかかってきたという。

アビスで最強の蜘蛛は、"地獄蜘蛛"であろう。幽霊のような白か、明かるい灰色をしていて、ほかの蜘蛛の数匹分の攻撃力を発揮する。耐久力も強く、攻撃的で、鋭いあごで執拗に攻めたてるので、倒すことが非常に難しい。強力な鎧もついには咬み切ってしてしまうほどだ。地獄蜘蛛は、アビスでもっとも恐ろしい生物のひとつだと言えよう。

ウィスプ



空中に浮かぶ光の塊であるウィスプは、一見無害に見える。とくにアビス内では単独で現われることが多いので、この美しい光に脅威を感じる者は少ない。しかし、現実は違う。ウィスプは破壊不可能なエネルギー体であり、目にも止まらぬ速さで移動して、電気ショックによる攻撃を加えることがあるのである。とても人間に太刀打ちできる相手ではない。友愛会の魔法使いたちは、ウィスプは魔法を操ることもできると考えている。事実、彼らはウィスプから魔法に関する助言を得ているのだ。

後書

カビルス卿の記録係、コルビーの手になる本書は、長い年月をかけて多くの読者の手から手へ渡りながら、ついに当図書館の蔵するところとなった。この機会に、司書官たる私、ジョーイはいくつかの歴史的事件の真相に言及したいと思う。

まず第一に、カビルス卿の死にまつわる数々の疑惑について。これにはぜひ注目したいものである。コルビーの記録によれば、カビルス卿は睡眠中に亡くなったとされる。よくあることだが、まったく突然の出来事であったそうだ。毒殺されたとか、魔法で殺されたとかいった噂はあるものの、それらを裏付ける証拠は何もない。だが、そうした、いらぬ憶測のせいでアビスの住人の間に不安が渦巻き、不協和音を生む結果につながったことは確かである。

第二に注目すべきは、カビルス卿が生前に集めた8つの神秘の道具の盗難事件である。カビルス卿のお考えでは、コロニー内の異なる種族やグループに、異なる神秘の道具を分け与えることが、コロニーの揺るぎない調和と安定をもたらすはずであったのだ。

ところが、これらの道具の分配について、誰にも伝えないまま卿は他界されたのだ。そのため、住人の間で大きな不和が起こったのである。カビルス卿のご意思だと主張して、勝手に道具を持ち去ったり、卿ご自身の墓を暴いて道具を奪い去ったりする者までででる始末である。8つの道具は失われ、それとともに住民の心も散り散りになってしまったのだ。

ここに、8つの神秘の道具を紹介する。遺憾ながら、それぞれの道具が持つ魔法の力については、具体的な内容は何もわかっていない。

- **真実の書：** ムーングロウの歴史的な哲学者ラベンハーストの筆になると伝えられる。この書には、人生の意味、人生の大切さ、感覚の不確かさ、たとえ目の前にあっても、物を見極めることの難しさ、などに関する深い考察が記されているという。

- **謙譲の指輪：** ジェンの息子、ビルがはめていた指輪である。ビルはロード・ブリティッシュ王立秘宝博物館で、展示物の修理や保存の仕事をしていたが、決して報酬を求めなかったと伝えられる。

- **奇跡の杯：** スカラブレイの最高の職人の手により、古代樫の芯材から彫り出された木の器。

- **武勇のシールド：** かつて、ロード・ブラックソーン閣下も所有しておられた盾。誘拐されたロード・ブリティッシュ陛下のかわりに、ブリタニアの統治者となられたとき（歴史書『運命の戦士』参照）、ロード・ブラックソーン閣下の御手を離れたと言われる。ブラックソーン閣下が摂政に退いたとき、失った勇気とともに彼を離れたことから、武勇の象徴として知られるようになった。

- **名誉の記章：** これは、誰あろうあの恐ろしき地下世界の探検行（歴史書『運命の戦士』参照）の際に、ロード・ブリティッシュ陛下をお守りし、ついには落命なさったゲラッチ卿が掲げておられた旗である。陛下をおいて逃げおおせることができたにも関わらず、ゲラッチ卿は誓いのとおりに最後まで陛下をお守り申し上げたのである。

- **カリバーンの剣：** 異世界から召喚されたアバタール殿のご出身の地には、伝説にうたわれる名剣があると聞く。この剣はその名剣を模して作られたものであり、虚偽から真実を切り離すことができるという。

- **献身の小蝋燭：** ミノック最高の職人の手になるもので、献身の神殿を照らすために使われていたことがある。「自らの身を削ることで光り輝く」という蝋燭の真実に感謝しないものは、その光を拝むことができないと言われている。

- **慈悲のワイン：** エンパスアビーの修道僧が醸造したワイン。これによって、人は他人の不幸にまで心を開き、ともにそれを感じることができるようになると言われる。

最後に、私は警告する。かの地獄の深淵、グレート・スティジアン・アビスには決して近寄らないように。カビルス卿の指導を失った後、コロニーの入植者たちは争い、互に傷つけ合ってきた。彼らからの連絡も途絶えて久しい。おそらく、人間はもう1人も生き残ってはいないであろう。

Joye, librarian

エレクトロニック・アーツ・ビクター株式会社
〒150　東京都渋谷区神宮前2-4-12 フルークス外苑